二〇一五年七月一〇日　開催
《「留学生と語る」オープンディスカッション》

「Intercultural Communication」という研究分野の現在と未来

サウクエン・ファン
（執筆＝ミラー成三）

■ディスカッションリーダー……Stephen Croucher
■ディスカッションアシスタント……Scott Bengs (Minnesota State University Moorhead)、Levi Erickson (North Dakota State University)、Ciara Schaben (University of Iowa)、Kathryn Knight (Queensland University of Technology)、Rebecca Vilan (Florida International University)、Odon Orzsik (Dartmouth College)
■コーディネーター……サウクエン・ファン

オープンディスカッション第二弾では、まずユバスキュラ大学（フィンランド）の Stephen Croucher 先生に「Intercultural Communication」という研究分野の現在と未来というテーマで話題提供をしていただき、その後六名の交換留学生を交えたグループに分かれ、異文化コミュニケーションについてディスカッションを行った。はじめに、Croucher 先生による話題提供を簡単にまとめたものを紹介する。

「異文化コミュニケーション」という用語自体は、過去も現在も変わらず、二つ以上の異なる文化、民族によるコミュニケーションを指している。一方で研究分野としてはかなりの広がりを見せてきており、現在では民族、宗教、社会、政治、経済の文脈をも扱っている。学問としての異文化コミュニケーションが発展していく中で、今では様々な大学における言語学、政治学、哲学、教育学などのコミュニケーション学以外の分野でも扱われるようになってきている。話題提供では特にこの分野の主要な研究領域である、アイデンティティと適応について取り上げる。

アイデンティティと異文化コミュニケーションは非常に深い関連性を持って研究されてきた。伝統的なアイデンティティ研究では、異文化コミュニケーションという異なる背景を持つ者同士がコミュニケーションを取ることによって、お互いのアイデンティティを確認したり、また自身のアイデンティティについて悩んだりすることが報告されている。一方で近年のアイデンティティ研究では、コンテクストや時間などによって人が様々なアイデンティティを形成するとし、新しい形のアイデンティティ概念を打ち出している。例えば、民族的アイデンティティ、性別アイデンティティ、宗教的アイデンティティ、個人的アイデンティティ、政治的アイデンティティ、社会的アイデンティティなどである。このような異文化コミュニケーションとアイデンティティについて焦点をあてる研究においては社会的アイデンティティ理論やフェイス理論などが特に有名である。

もう一つの中心的な研究領域として、文化適応に関する領域がある。例えばKimの適応理論のように文化に適応していくプロセスを研究する領域である。適応の研究では、異なる文化からきた人が、本当にもう一方の文化内の人間になることができるのか、という問いに焦点があてられる。しかし適

ディスカッションリーダーのCroucher氏

コーディネーターのファン先生

応のプロセスの中で、異なる文化背景を持つ者が、同じ文化内の者として受け入れられるかについては様々な研究結果が見られ、非常に難しい問題であることが言える。

では今後の異文化コミュニケーションという学問はどうなっていくのだろうか。興味深いことに、近年では異文化コミュニケーションは、ヘルスケアと一緒に研究されることが増えてきている。異文化・ヘルスコミュニケーションは、言語・非言語的コミュニケーション、ポライトネスとフェイス維持、パワー・ディスタンス（権力格差）、アドレッシングの方法など、様々な課題を共有している。そのため二つを一緒に研究するメリットが大きいのである。実際アメリカやイギリスの医学学校では、コミュニケーションや文化などを扱う授業を行うところも出てきている。

ある国で、その国の言葉を話せない人が医者に行くのは非常に怖いことだろう。ある研究では、その国の言葉を話せない人は、話せる人と同等の医療処置を受けられないことが報告されている。異なる文化背景を持つ者は、その国の者とは異なる医療処置を受けることがあるが、これは必ずしも言語の問題であるとは限らない。アメリカにおける富裕層、中間層の白人と、ヒスパニック、黒人は同じ言語を話すにも関わらず、経済的、地理的な要因によって同等の医療処置を受けることができない場合がある。また医療の質は、薬や病気がその文化でどのように理解されているのかによっても影響される。例えばてんかんによる発作は、いくつかの文化では病気ではなく神からの贈り物だとされている。医者はこのような文化の人々にどのような説明をすればよいのだろうか。異文化コミュニケーションはこういった課題にも有効であると考えられる。

このように異文化コミュニケーションの研究分野は拡大しているが、いまだに様々な課題が残されている。ここでは、特に今後考えていかなければならない三つの課題を指摘しておきたいと思う。一つ目はTerm（用語）、すなわち「異文化コミュニケーション」がどのようなことを指しているのか、という問題である。研究分野が学問を超えて拡大しているがゆえに、それぞれの研究においてこの用語がどのような意味で使われているかが異なってきているのである。これは異文化コミュニケーションの深さや広さを示すものでもあるが、学問としての異文化コミュニケーションを考えたときに、用語の意味が異なっているという状況は良いことなのだろうか。今後議論を進めていかなければならないだろう。

二つ目は社会学的なアプローチとコミュニケーション生物学的（Communibiological）手法についてである。これまで異文化コミュニケーション、もしくはコミュニケーションの研究は社会学習や状況アプローチによって研究されてきた。す

なわち、コンテクスト、文化、状況がコミュニケーションに影響を及ぼしているという考えから研究がされてきたわけである。ところが近年コミュニケーション生物学的アプローチという、生物学的な指針からコミュニケーションを研究していく手法が少しずつ広がってきている。これはあるタスク、例えば二〇名の前でスピーチを行うというタスクを用意する。そのタスクの前後に、体温の測定、肌の測定、血液採取、心電図、脳波のデータなどを記録し、それら様々な生物学的なデータから分析を行うという手法である。興味深いことに、自分がスピーチをするのが苦手と言っている人でも、生物学的にみるとそのような反応をしていない場合もある。このような、人の意識ではなく、身体的、脳波的な反応からコミュニケーションを見ていくという手法が広がりを見せつつある。

三つ目は学問の広がり方についてである。この分野の多くの研究は、アメリカや東アジアで行われており、その研究方法や理論もほとんどがアメリカで、もしくはアメリカで研究方法を学んだ者によって唱えられたものである。異文化間の問題をより正確に捉えていくためには、「誰」が異文化コミュニケーションを学ぶか、また「どこ」で研究が行われ理論が構築されるかなどをも拡大していかなくてはならないだろう。例えば現在のところ中東、アフリカ、中央アジア、南アメリカなどで行われた研究はごくわずかである。

「異文化コミュニケーション」はこれまで様々に拡大、発展してきた。それにともなって様々な新しい課題も生まれている。しかし、「異文化コミュニケーション」という学問はこれからも発展していけるし、発展していくと信じている。

以上 Croucher 先生の話題提供の内容を、簡単に紹介した。続いて、話題提供の後に行われたディスカッションで挙げられた意見をいくつか紹介したい。

ディスカッションでは各グループで様々なトピックが話されていたが、どのグループにおいても異文化コミュニケーションに関連した興味深いディスカッションが行われていた。例えば様々な国の文化の違いについて、「ベトナムではレストランに普通に犬がいたりして戸惑うことが多い」という意見や、「アメリカなどでは転職は当たり前のことだが、日本では一つの職を長く続ける方が好まれる」などの意見が挙げられた。全体を通して、文化的な違いよりも大きな問題とされていたのは、言語の問題である。「例えば区役所に行ったときなどに使う日本語は、学校では学ばない非日常的な日本語だし、英語も通用しない場合が多いのでとても大変」という意見が挙げられていた。ここから分かるような、ある種非日常的な空間において使用される言葉の問題には多くの人が共感をしていたようである。その他にも、人をその文化内・外の人で

あると判断する基準は国によって違う、ということが議論されたグループもあった。例えば日本では、日本生まれ、日本育ちで日本語が非常に流暢な人であっても、外見が日本人と違っていたら日本人とは判断されない。しかし、オーストラリアでは、オーストラリアで生まれて、育っていれば多くの場合オーストラリア人として判断されることなどが指摘された。また、「異文化」という言葉そのものについても議論がされ、「異文化コミュニケーションというと、ある国の人と外国人のコミュニケーションを対象とすることが多いが、同じ国の人でも出身が遠ければ異文化と呼べる場合があるだろう」という意見などが挙げられた。

グループディスカッションの様子

まとめ

二回のオープンディスカッションを通して、留学生も日本人学生も異文化コミュニケーションを通して経験した、自身の変化について注目していた。留学生は日本に来てから自分の文化と日本の文化の違いを知り、それまで当たり前であった自分の文化から日本の文化へ適応していく過程で感じたことなどを多く語っていた。日本人学生も、自身の留学や旅行の経験、また日本での接触経験から得た異文化の経験と、自

身の変化について語っていた。お互いが異文化接触を通して考えたこと、感じたことを知る、非常に良い機会になったのではないだろうか。また、話題提供やディスカッション中にも新たな気づきが生まれており、このディスカッション自体が、よい「異文化」接触の経験になっていた。

一方で、特に第二弾のディスカッションにおいては、「異文化コミュニケーション」という学問そのものや「異文化」というターム自体について考察、再考する機会にもなっていた。このような「異文化」に触れる経験を通して、学生たちが今後様々に適応、変化していくことによって「異文化コミュニケーション」という分野がさらに発展していくのではないだろうか。